

## 「サウロ、ダマスコで福音を宣べ伝える」

2016年04月30日

使徒言行録9章19節～22節。サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。これを聞いた人々は皆、非常に驚いて言った。「あれは、エルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。また、ここへやって来たのも、彼らを縛り上げ、祭司長たちのところへ連行するためではなかったか。」しかし、サウロはますます力を得て、イエスがメシアであることを論証し、ダマスコに住んでいるユダヤ人をうろたえさせた。

サウロのダマスコ途上の回心はどのような出来事であったのだろうか。それは、パウロが書いた手紙から推測できる。サウロはエルサレム教会の信徒たちを迫害していた時、自分は宗教的真理、正義を遂行していると自負していた。正義を行っていると自惚れると、自分自身が見えなくなる。「殺してはならない」という律法を知っていながら、信徒たちを殺害しようと息を弾ませていた。この矛盾に気がついてなかった。復活の主イエスに出会い、打ちのめされ、アナニアの解き明かしを受けて、主イエスの十字架は罪を赦す「愛」であることを知らされた。主イエスの復活は神の命のリアリティに触れることであった。律法を守ることによって義しい者になるのではなく、信仰によって一方的な恵みによって神に義とされていることを知った。死より復活した主イエスの命に包まれている自分を見出した。この転換はサウロを自由にし、主イエスの十字架に倣う愛に向かって立ち上がらせた。そこに、復活の命が働くと思信したのである。

このような回心を経験したサウロは数日間、弟子たちと共に過ごした。そしてすぐに、あちこちの会堂で「この人（イエス）こそ神の子である」と福音を宣べ伝え始めた。これを聞いた人々は驚いて「あれは、エルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。また、ここへやって来たのも、彼らを縛り上げ、祭司長たちのところへ連行するためではなかったか」と言い合った。サウロの言うこと、なすことが180度転換した訳であるから、人々の当惑と驚きは当然であろう。しかし、サウロはますます力を込めて、イエスがメシア（キリスト）であると論証した。ダマスコに住んでいたユダヤ人たちは、サウロのあまりの変わりようにうろたえた。

使徒言行録の著者は、サウロは回心後、数日してダマスコで福音を宣べ伝えたとして記している。ところが、パウロはガラテヤ書1章15節～17節に下記のように書いている。「しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださいました神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。」御子イエスが啓示され、異邦人伝道の使命が告げられたという、この言葉がサウロの回心であったとすると、回心後、アラビアに退いたことになる。こちらが事実ではないだろうか。パウロの宣教は誰も真似のできない凄まじいものであるが、彼を超人化することはない。パウロも生身の人間で悩み、苦しんでいる。回心後、アラビアに退いて、心を整理して、再出発に備える時が必要であったと考えるのが自然であろう。使徒言行録の著者は、サウロの霊的な力の豊かさを力説するために、即座にダマスコ伝道を始めたと書いたものと思われる。いずれにしても、サウロは全く新しい人間に造り替えられ、命を賭して福音宣教に駆り出される回心を体験したのである。